

武蔵野日曜集会

福音の奥義

——エペソ書第3章——

1992年1月26日（武蔵野）

小池辰雄

キリストの囚人「奥義」「ミステリオン」共に一体となる 無量のキリスト エピグノーシス 信交一如の世界 肉体は空気の中に、魂はキリストの中に 御霊によれば強くなる キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さ 聖霊によってキリストと一つに 選びの器

【エペソ3】

1 この故に汝ら異邦人のためにキリスト・イエスの囚人^{めしうど}となれる我パウロ
——2 汝等のために我に賜いたる神の恩恵^{めぐみ}の経綸^{けいりん}は汝ら聞きしならん、³ 即ち
我まえに簡単に書きおくりし如く、この奥義は黙示にて我に示されたり。⁴ 汝
等これを読みキリストの奥義にかかわる我が悟^{めづり}を知ることを得べし。⁵ こ
の奥義は、いま御霊によりて聖使徒と聖預言者とに顕されし如くに、前代に
は人の子らに示されざりき。⁶ 即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに
在りて共に世嗣^{よつぎ}となり、共に一体となり、共に約束に与^{あずか}る者となる事なり。
⁷ 我はその福音の役者^{えきしや}とせらる。これ神の能力^{ちから}の活動^{はたらき}に随^{したが}いて我に賜う恵
の賜物^{たまもの}によるなり。⁸ 我は凡ての聖徒^{すべ}のうちの最小^{いと}き者よりも小き者なるに、
キリストの測るべからざる富を異邦人に伝え、⁹ また万物を造り給ひし神の
うちに、世々隠れたる奥義の経綸の如何なるもの乎^かをあらわす恩恵を賜わり
たり。¹⁰ いま教会によりて神の豊かなる知恵を、天の処にある政治^{まつりごと}と權威と
に知らしめん為なり。¹¹ これは永遠より我らの主キリスト・イエスの中に、
神の定め給ひし御旨^{みむね}によるなり。¹² 我らは彼に在りて彼を信ずる信仰により、
臆^{おく}せず疑わずして神に近づくことを得るなり。¹³ されば汝らに請う、わが汝
等のために受くる患難^{なやみ}に就きて落胆^{きおち}すな、是なんじらの誉^{ほまれ}なり。
¹⁴ ¹⁵ この故に我は天と地とに在る諸族の名の起^{おこ}るところの父に跪^{ひざま}ずきて
願う。¹⁶ 父その栄光の富にしたがいて、御霊^{みたま}により力をもて汝らの内なる人
を強くし、¹⁷ 信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、汝らをして愛に
根^{もと}ざし、愛を基^{もと}とし、¹⁸ 凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・
深^いさ^かの如何^{いか}許^{ばかり}なるかを悟り、¹⁹ その測り知る可^べからざる愛を知ることを得し
め、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給はん事を。



20 願わくは我らの中にはたらく能力に随いて、我らの凡て求むる所、すべて思う所よりも甚く勝る事をなし得る者に、²¹ 栄光世々限りなく教会によりて、又キリスト・イエスによりて在らんことを、アアメン。

●キリストの囚人

今日はエペソ書第3章を「福音の奥義」と題してお話します。

1 この故に汝ら異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となれる我パウロ

——² 汝等のために我に賜いたる神の恩恵の経綸は汝ら聞きしならん、

この「囚人」という言い方は、あとピレモン書1章9節と、この二箇所しかない。だから、非常にこれは強い言葉なんです

正直、パウロは囚人にされましたから、キリストの為にローマで捕らえられて獄に繋がれている者という意味と、直接に「キリストの囚人」という意味と、その両方の意味をこの中に含めているようなわけです。

囚われ人ですから、自分は完全にキリストに囚われている。「囚人」というのは「奴隷」という言葉よりもつと強い。「僕」と訳しているのは、「奴隷」のことなんで、「囚人」は鎖に繋がれて動きがとれないわけです。パウロはこの場合、ローマでは鎖ではなかったけれども。とにかく、完全に自分の自由がない。ところが、相手がキリストですから、本当の自由を持っているというわけです。

自分の自由に死んでいると、相手が——人ではダメですけども——神・キリストですから、その意思が完全に伝わってきます。だから、神の自由、キリストの自由が、パウロの自由になっている。それが、この「囚人」の素晴らしさです。だから、パウロが「自由」と言う時には、普通の文化人が言う自由と、およそケタが違う。ルターが『クリスチャンの自由』という本の中で言った、あの「クリスチャンの自由」もパウロ的な自由を言っているわけです。

●「奥義」「ミステリオン」

「我に賜いたる神の恩恵の経綸」

「経綸」という、むずかしい言葉が書いてある。神の恵に従って、とやかくいろいろな事を始末をする、管理をする、管理や始末をすることを「経綸」と言います。いろんな事を、仕えてやっていること。「ディアコニッセ」という言葉がありますが、あれと同じ内容の言葉です。この場合の「経綸」という字は「オイコノミア」という字ですけども。

3 即ち我まゝに簡単に書きおくりし如く、この奥義は黙示にて我に示されたり。

「まゝに簡単に書きおくりし如く」とは、この手紙の始めの方で簡単に言ったように、という事です。



「この奥義は黙示にて我に示されたり」

とは、ガラテヤ書でも言っているとおり、誰によつたのでもなく、キリストに直接に撃たれて、そして示されたもの、これが「奥義は黙示によつた」――「黙示」は「顕示」という字です――「黙示によつて示された」ということです。隠れたものを顕らかにするとう意味です。本当は「黙示」という訳はあまりいい訳ではない。「黙示録」のあの「黙示」と同じ字です。「アポカリュプシス」という。

「奥義」は「ミステリオン」という字です。「ミステリー」です。普通の言葉では伝えることのできないような深い、神秘的な――正に「神秘」という訳はいいと思いますが――神秘的な内容です。「ミステリオン」という字は普通は「神秘」と訳しますが、「この神秘は…」と言つたつていいわけですね。深い内容、普通の理性や悟性では分らない内容、ハッキリ言えば、聖霊によらなければ掴め^{つか}ない内容、これが「奥義」です。「ミュエオー」という字から来るんで、英語では「イニシエイション」という言葉です。「イニシアティブ」というけれども、「最初にやる、初めてやる」ということから「イニシアティブをとる」なんて、よく言いますけれども。あれはこの「奥義」と同じ字です。それから、他には伝えることのできない秘伝、「秘伝を伝える」という意味になる。妙な言葉です、この「ミュエオー」という字は。

「奥義は黙示によつた」とは、

「神さまから、キリストから直接に啓示されたことによつた」ということ。

4 汝等これを読み^{よみ}てキリストの奥義にかかわる我が悟^{さと}を知^しることを得べし。

「これを読み^{よみ}て」の「これ」とは何か分からなくて、注解書が困っているんですが、「この手紙を読み^{よみ}て」と簡単にそれでいいのではないかと私は思う。

5 この奥義は、いま御霊によりて聖使徒と聖預言者^{よめい}とに顕されし如くに、前代には人の子らに示されざりき。

「使徒と預言者」。旧約では「預言者」という。それから、「預言者」という言葉は、新約でも使う。「教師」よりももう少し深い示しを受ける人たちを「預言者」という。旧約の「預言者」とは内容は違う。ロマ書8章16節を見ると、

「御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。」(ロマ8・16)

御霊が我らの霊の中に入つてこない、この霊もあやしいけれども、人間の一番中心はこの「霊」「スピリット」です。御霊を受ける一番のところは、やっぱり、人間の「霊」のところですから。

「前代には人の子らに示されなかった」

と。即ち、旧約では未だかつて示されたことのない、全くキリストを通して来た真理が「奥義」です。



●共に一体となる

6 即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに在りて共に世嗣となり、共に一体となり、共に約束に与かる者となる事なり。

ここに非常に、「共に」「シン」という字が使つてある。これは大事なことで、ユダヤ人もギリシヤ人も何も区別は要らないんだと。これがこの「共に」ということ。福音の世界は人種的な区別はいらない。みんな同じ人間だ。

「キリスト・イエスに在りて共に世嗣となり」

と。ユダヤ人たちが世継ぎではない。

「誰でも本当にキリストを受けとれば、これは神の国の世継ぎになる」

と。だから、

「共に世嗣となり、共に一体となり」

と。特に、

「共に一体となる」

という、この言い方が「ミステリオン」の非常に大事な内容です。「ソーマ」「体」という字に、「シン」「共に」がついて、「シソーマ」と読むけれども、ドイツ語でいうと、「ミットアインフエアライプト」、一緒に一つの体になつてしまう。これが「共に一体となり」です。キリストの中に、ユダヤ人も異邦人もみんな一つになる。共に一体となる。

「共に約束にあずかる」

神の国を受けとる約束、「世嗣」と同じことです。

7 我はその福音の役者とせらる。これ神の能力の活動に随いて我に賜う恵の賜物によるなり。

「役者」とは、特別な働き手のこと。「能力の活動」、似たような言葉です。いわゆるエネルギー

の「エネルゲイアン」という言葉と、ダイナマイトの「デナメオース」という字の二つです。

「恵の賜物」とは、よく出てくる言葉ですが、キリストの「恵」は具体的にいうと「聖霊」のことです。「賜物」というと、これは聖霊を賜物としたんで、「恵」と「賜物」を分けて使う場合もある。その時は、いわゆるカリスマ的な力、能力、それが「賜物」で、「恵」は、カリスマ的な能力の元になるところの「聖霊」のことになる。「聖霊を受けている」ことが、「恵を受けている」という具体的な内容になる。

●無量のキリスト

8 我は凡ての聖徒のうちの最小き者よりも小き者なるに、キリストの測るべからざる富を異邦人に伝え、

「一番小さい者よりも小さい」

という、これは大変な言葉です。ドイツ語の「ゲリング」「小さい」という字の最上級の「ゲ



リングスト」に、更に「アッラー」がついて、「小さいものよりかまた小さい」というような言い方になる。ギリシヤ語では「エラキストテロー」です。

「実にとるに足らない者だ」

と。ということとは、

「自分は罪びとの首だ」^{かしら}

とパウロが言っているあの言葉を、別な言葉で言ったわけでは

「しょうがない奴なんだ、とても聖徒なんて者ではないんだ」

と。ところが、そうやって完全に自分をどん底に落としている人は、逆にもの凄い世界に入る。

「^{いとちいさ}最小き者よりも小き者なるに、キリストの測るべからざる富を異邦人に伝

え」

と。「小きき者なるに」でなくて、むしろ、

「小きき者であるからこそ」

なんだ。そういうように、

「自分はどん底だからこそ^{かえ}反つて」

ということ。「キリストの測るべからざる富」、「富」は富という字なんですけれども、もちろんこれは、「財」のことではない。「測るべからざる」という言葉はもともと、

「いくら追求しても追求しきれない、後からいくら追っかけても追いつき得ない」

というような内容の言葉です。だから、

「とても追求できない、内容は無量だ」

ということ。「キリストの無量」と言った方がいい。「無量のキリスト」と言ってもいい。「富」

というのは「プルーツ」という字ですけれども、「キリストのプルーツ」。「充満」「プレ

ローマ」という字ともまたちよつと違う。これは、正に「富」だ。

「追求することのできない無量の内容」

ということですよ。

●エピグノーシス

9 また万物を造り給ひし神のうちに、世々隠れたる奥義の経綸の如何なるもの乎^かをあらわす恩恵を賜わたり。

ずいぶん、ややっこしい言い方をしている。ずっと隠れていた、それをキリストが現した、「奥義の経綸のいかなるかを」――「経綸」とは「取り扱い」です――奥義を取り扱うこと。

10 いま教会によりて神の豊かなる知恵を、天の処にある政治と権威^{まつりごと}とに知らしめん為なり。

パウロは「教会」と言う時には、ユダヤ人も異邦人も区別のない、キリストの霊によつ



て集められたる者が「教会」です。これは、ブルンナーが『教会の誤解』という本にハッキリ書いています。あれはいい本です。

「今の一般の教会は本当の教会を知らないではないか」

と、ブルンナーが書いたものだから、一般の教会ではブルンナーを読まない。狭量なもんです。「本当にその通りだ」と言って読めばいいのに、「バルト、バルト」と言って、ブルンナーを無視するけれども、そうではない。あれは素晴らしい。『教会の誤解』を訳したのは、S君というんだけど、あの人は訳しながら、その世界に入らない。私が訳せば良かった。「神の豊かなる智慧」、これは「知識」ではないから、「智慧」という言い方がいい。あの「上智大学」の「上智」「ソフィア」です。「上智」あるいは「超智」と言ってもいい。いわゆる「知識」を越えたもの。「上」よりか「超」なんだ。超越した知識です。「エピグノーシス」という、「エピ」がついている。それが本当の「ソフィア」です。それが「豊かなる智慧」。「智慧」の「慧」の字は難しい字ですけども、これはやつぱりこの字を書いた方がいい。「恵」という字をこの頃書いているね、「恵」でも悪くはないけれども。

「智慧を天の処にある政治と権威とに知らしめん為」

「天の処にある政治と権威」ですから、神の神的な政治です。もともと、政治は神さまの意思を代表してやるのが、本当の政治だ。だから、本当の政治は、宗教を土台にしなければ本当の政治はできない。

「政教分離」なんて言っているけれども、本当は分離したらダメなんだ。いわんや、文部省が、政権が変わるごとに、文部大臣が変わって、何をしているかと言いたい。文部省というのは、なぜ、司法省みたく独立させないかと思う。そういうことに気が付かないのかね。何しろ、日本はもつと大胆な改革をしなければダメです、いつまでたつてもこんな事では。

学校制度だってそうです。その学校へ行けば、みんなやりたい事ができる。無試験で入れてやる。その代わり、中で鍛える。ダメだったら出ていけと、それが本当の学校だと思う。「受験勉強」なんて言わないんだ。

キリストの無量の内容を掴まえるには、「奥義」の世界に入らなければ、それが分からない。

●信交一如の世界

11これは永遠より我らの主キリスト・イエスの中に、神の定め給いし御旨^{みむね}によるなり。12我らは彼に在りて彼を信ずる信仰により、臆^{おく}せず疑わずして神に近づくことを得るなり。

12節は大事な言葉です。「我らは彼に在りて」で、「によって」ではない。彼の中に入って、「彼を信ずる信仰により」。この「彼に在りて」がなくて、ただ「信ずる信仰」ではダメなんです。大事なのは「彼に在りて」です。だから正に、

「エン・クリスト」(キリストの中に在って)



です。ダイスマンという人が『パウルス』という素晴らしい本を書きましたが、パウロの「キリスト神秘」というのは、パウロが本当にキリストの中に入って一つになった。これを、「キリスト神秘」(クリストス・ミステイク)という。パウロにあつては、信仰は正に「信交」です、信じ交わっている世界で、仰ぐのではない。ここへ入らないと、聖霊の世界に入らないから。キリストと一つとならないと。だから、信交の現実には「一如」の世界です。「フエアインツ」、「一つになっている」世界。

「風林火山」という言葉がある。これは孫子の兵法の言葉だけれども、我々の生活の意義にもちゃんとなる。

「疾如風、徐如林、侵掠如火、不動如山」

「孫子の兵法に曰く、その疾きこと風の如く、その徐なること林の如く、その

侵掠は火の如く、動か不ること山の如し」

という。これは武田信玄が好きな言葉だった。真理の世界で、生活の世界で、そのような在り方が「一如」の世界です。

「われキリストの中に」

と。十字架に贖われて、十字架の門を通つて、中へ入る。そうすると、これは聖霊の世界です。キリストと一つになる。

「懼れなく至聖所に入る」

とは、「至聖所に入る」というのは、キリストの中へ入ってしまうこと。一つになっている世界が「奥義」の現実なんです。そして、奥義の現実には、「一つになる」ということは、それ自身がひとつの「ミステリオン」なんです。そしてまた、「測るべからざるキリストの真理の内容」、それがまた「ミステリオン」だ。だから、「ミステリオン」の位置はどこかと言うと、「キリストの中に入っている」ことです。

「われキリストの中に、キリストわがうちに」

という、これが「ミステリオン」の現実です。

● 肉体は空気の中に、魂はキリストの中に

「信仰によって義とされる」なんて、いつまでも言っているうちはダメなんだ、プロテスタントの信仰は。プロテスタントの信仰は、無教会もしよつちゆうそんな事を言っている、「信仰によって義とされる」と。全く観念です、そんなのは。それは、パウロはそう言つたよ。けれども、パウロが言っている時は、そんな観念でものを言っているんじゃない。「信じ交わる」ことなんです。「ビリーブ・イン」なんです。ただ「ビリーブ」じゃない。

「ビリーブ・イン・クライスト」(英)、「グラウベン・イン・クリストス」(独)

です。だから、この「イン」の「中に」がなかったら、ダメなんです。ところが、「キリストを信ずる」ということを、塚本先生は「キリストに信ずる」と言つた。「に信賴する」の「に」



なんだ。それをまた、みんな一生懸命で塚本先生の真似をしている。そうじゃない。「を」でも「に」でもない。「の中に」です。「なか」でなければダメなんです。だから、聖霊を受けてないと、この「中に」が言えない。

私たちは「空気」を思っ生きてるのか？ 空気の外ではないんだ、空気の中に居て、空気を吸って、空気でもって血がしょっちゅう清められている。空気と一つになっている。我々は、この大気、「気」と一つになっているんだ。「天気」でもいい、天の気、大気。それと一つになってこそ、我々の肉体は生きている。これは、肉体の「ミステリオン」の世界です。それは、霊の世界だって同じことなんだ。どこまでも対象化して、「我と汝」なんてやっているうちは、ダメなんだ。汝か我か分からないような世界に入らなくては。

「我は汝なり、汝は我なり」

と、そういう「一つ」です。本当の友だちも、その友だちと自分とは一つだと。夫婦の関係にしろ、親子の关系到しろ、みんなこれ、「一つ」。本当の世界はみんな「一つ」。主従の关系到しろ、社長と社員の关系到しろ、本当の一つの世界に気持が通じたら、もう「組合」も何もいりはない。組合でしょっちゅう対立していたらダメです。

それが、「一如」の世界が「ミステリオン」の世界です。絵を描く人は、大自然と一つに溶け合わなければ、本当の絵は描けない。何でも「一つ」の世界に入らなければダメなんです。そういうところで、実に偉大な人はゲートです。彼は、「神―大自然―我」が一如になっている。日本の文豪の中にそこまでいっているのはいない。「則天去私」なんて漱石が言っただけでも、漱石もとうとうそこまで行かなかった。

私たちは、ありがたいことに、十字架・聖霊ではその世界に入ってしまう。これが本当の恵みの世界です。本当の恵みの世界は「ミステリオン」の世界。「インアイナナデル」、英語では「インワンアナザー」、相互内、在関係です。だから、

「彼にあれば、臆せず疑わずして神に近づくことができた」

ということ。キリストは神さまに「近づく」どころじゃない。キリストが神さまに「父よ」と言っ呼べば、その父の中に入っしまふんだ。今度は、キリストは神さまの中で祈っている。おなかの中で祈っている。お母さんのおなかにいる胎児みたいなものだ。

胎児というのは、お母さんの感ずることが全部そこに、「ミステリオン」の世界で、通じている。だから、ヘンなことを思うと、胎児の頭がおかしくなったりする。だから、胎教というのは――教でも何でもなし――おのずから伝わるから、非常に大事なことです。

●御霊によれば強くなる

それから、その最後の世界。これが一番大事なところ。

13 されば汝らに請う、わが汝等のために受くる患難に就きて落胆すな、是な
んじらの誉なり。



14 この故に我は天と地とに在る諸族の名の起こるところの父に跪ひざまずきて
願う。16 父その栄光の富にしたがいて、御霊みたまにより力をもて汝らの内なる人
を強くし、17 信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、汝らをして愛に
根もとざし、愛を基とし、

「御霊」が先になつてゐるでしょ。「御霊」が先で「信仰」が後になつてゐる。

「御霊によれば、自然に力が強くなります、内なる人は強くなります」

ということ。「強くし」なんて言わなくて、「強くなる」と書けばいいんだ。

「御霊によれば汝らの内なる人は強くなる」

と。「どうやったら、強くするんだ？」なんて思つたら、そうじゃないですよ。もつと、パウロは大胆に書いてくれないと。

「御霊によれば強くなるよ」

と。そして、「信仰によりてキリストを汝らの心に住ませ」は、「御霊を受けとることによつて」。これはさつき言つた、「ビリーブ・イン」によつて。信仰も、キリストの中に信ずる。このギリシヤ語はそういう言い方になつてゐる。妙なんだ、ギリシヤ語というのは。このところはよくできている。どこに一体、目的語があるかというところ、目的語がない。17節に、「信仰によりて」「ディア テース ピステオース」という言い方もあるしね。それから、16節に、聖霊によつて「内なる人の中へ」「エイス トン エソー アントローポン」と。
「彼の力を持った栄光の豊かさに従つて強くされ、彼の御霊によつて内なる人の中へと与えられるように」

と。「内なる人を強くされるように」と訳してあるけれども、直訳すると、「中へと与えられるように」という言い方をしてゐる。どこまでも、この「エイス」「の中へ」という言葉が、「動的に入つて行く」という気持ちが表れてゐるんです、ギリシヤ語でも。おもしろいです。

●キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さ

そして、その次は凄い。

18 凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何いかばかり許なるかを悟り、

「愛の広さ・長さ・高さ・深さ、愛がいかに多次元的な凄い次元のものであるか」ということだ、今の我々の言葉でいへば。愛の多次元性を、

「多次元性なる愛の如何ばかりなるかを悟り」、

19 その測り知る可べからざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給はん事を。

「測り知ることができないものを知る」という言い方が面白い。

「測り知ることのできない愛を知ることを得しめる」



と、この「知る」はもちろんミステリックな「知る」です。頭で知るのではない。もう悟りの世界だね。仏教だって同じことだ。一番深い所はみんなこういう世界です。親鸞でも、法然でも、道元でも、日蓮でも、最後のところはみんなそういう世界です。だから、聖霊でもって、我々は仏教の第一流のものはみな分かるというのは、そういうことです。

「測り知る可からざる愛を知ることを得しめ」

と、こんなのを頭で読んだら、分からないです。

「測り知ることのできないものを測り知るとはどういうことか」

と、すぐ「どういうことか？」と研究しようと思う。バカだね。パウロの気持を直感できなかったら、ダメなんです。直感、体感できなかったら。ゲーテの詩なんかを見ても、そうだね。何だかんだと解釈したって、そうじゃないんだ。

●聖霊によってキリストと一つに

エペソ書3章の14節から19節まではとても楽しい所だ。特に、16、17、18、19節は。

「十字架で完全に贖われてしまった」

ということを受けとることも、一つの「神秘」です。頭で考えると、

「そんなバカなことがあるか」

と普通の人は思うわけだ。

「ああ、どうぞ、いくらでもバカにしてください。私は馬鹿げ切っている」

と。それから、

「聖霊によってキリストと一つにされている」

ということ。

「こつちがどうであるこうである」

そんなことは問題じゃない。完全に贖い取られているから、聖霊によってキリストと一つにされている。無条件に、「ありがとうございます」の他に言いようがない。キリストの中に本当に祈り入ると、愛の、もの凄い次元の愛であるということが分かる。それが「奥義」です。キリストの愛の無限の次元が、これが「奥義」「ミステリオン」の世界です。その「ミステリオン」の世界は、「ミステリオン」の現実、場に入らなければ。「場」とは何かというと、「イン」の世界です。この「イン」が、「ミステリオン」の大事なポイントなんです。私は空気の中にいる。空気は私の中にある。相互関係の「中」の世界です。これが「イン」の世界です。空気を見ようと思ったって、見えない。見えないけれども、充滿している。魂はどこにあるか分からない。けれども、人間の一番根源は魂。それだから、「宗教」なんて言わなくたって、

「本来、人間は宗教的な存在にできているのに、そのことになぜ気が付かないか」

ということだけの話なんだ。特別なものでも何でもない。何を見たって、みんな「ミステ



リオン」ですよ、本当は。花を見たって。だから、本当の「ミステリオン」の世界は、「何も分からないということが分かった」

ということ。それが入口だよ。そうすると、ミステリオンの世界に入れる。

● 選びの器

ところが、無教会では、「ミステリー」「神秘」という言葉が嫌いなんだ。私はよく知っています、無教会時代に。

「無教会の信仰は神秘でない」

なんていう。「神秘」というと、何かおかしいと思っている。どっちがおかしいか。全く、始末がわるいね、あの無教会というのは。今でもそうですよ。「相変わらず観念の世界になるなあ」と思つて、気の毒になる。

あなた方はい世界にいますよ。普通の人も分からない。いいですか、皆さんは本当に選びの器なんです。選びの器がそれぞれの環境において証していく。知らない間に影響させる。御霊の世界にあれば、知らない間に、いい影響を与えるから、遠慮なしに、それこそ、「ミュエオー」(奥義)を「顕示」(アポカルユプシン)したらいい。どんどん顕示したらいい。もったいないです。

本当のことを言うと、人間の魂は動く。本ものには感ずるようになっていく。ウソものはダメ。牧師さんの話なんか聞いていると、くたびれてしまうんだ。私は話していると、だんだん力が出てくる。普通の牧師さんは、くたびれたというけれども、ちつともくたびれない。逆に、くたびれるどころのさわざじゃない、上から力がくる。全く、ミステリオンの世界だから仕方がない。

「キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さ」

と、面白いことを言うね、パウロは。こういうことを遠慮なしに書けるパウロは素晴らしいよ、やつぱり。「長さ」なんて言ったら、どういうことか分からないんだ、「愛の長さ」なんて。面白いよ、とても。要するに、凄い次元だ、大変な次元だ、ということ。

後は、もう祈りです。

20 願わくは我らの中にはたら^{ちから}く能力^{したが}に随^{したが}いて、我らの凡て求むる所、すべて^{いた}思う所よりも甚^{まさ}く勝る事をなし得る者に、²¹栄光世々限りなく教会によりて、又キリスト・イエスによりて在らんことを、アアメン。

神さまに対する祈りだ。

パウロの手紙があったから、この新約聖書も成り立ったようなわけですよ。彼は、聖書を編もうなんて思っていたんじゃないんだから。後から、これが聖書になってしまった。それが本当の世界ですね。

